

巻頭言

思い出すがまま

専門日本語教育学会長

古城 紀雄

(大阪大学世界トップレベル研究拠点 (WPI) 免疫学フロンティア研究センター (IFReC) 特任教授)

「もっと私たち留学生の学習・研究に役立つ日本語を教えてください」—こんな留学生の切なる声が、今思えば、今日の「専門日本語教育学会」創始への源泉であった。私が、留学生専門教育教官講師として、大阪大学工学部留学生相談室を常時開室したのは昭和63年である。その当時、「宿舍」、「奨学金」と並んで相談件数の多かったのが、日本語習得に関する相談・提案であった。多様な留学生の全てが日本語教育に不満を持っていたわけではないが、当時の日本語教育が「留学生のニーズ」に応える十分な配慮をしていなかったのは確かである。

「じゃ、何を教えてくださいのか？」—日本語教育には直接関与しない立場ではあったが、私はすぐに調査をし、「自分の専門分野の論文を日本語で書きたい」との明解な答を得た。至極もったもんな願いである。留学生はもとより、我が国で専門職として働くことを目指す人々が、それぞれの専門分野の業務、学習、研究を行う手段として用いることのできる日本語を学びたいと思うのは当然だろう。ところが、当時の日本語教育関係者は、この「専門」および「論文作成」というキーワードに対して、一定の理解は示すものの、本格的に対応しようとする熱意はないと私には思われた。様々な日本語学習者を可能な限り「専門」別に分け、それぞれに適切な教育を提供するという、今日では当たり前になっていることが、具体的に進まなかったのである。

「専門」という語には、いまでもアレルギーを起こすらしい日本語教育関係者もないわけではない。しかしながら、専門日本語教育は、ほどなく始まった「専門教育教員との協働」による教育の実践が進むにつれて、やや緩和された形で、広く日本語教育関係者に認識されるようになった。この「協働」は専門日本語教育にとって不可欠の要素である。よく協働した成果の最初の具体化が、日米での「科学技術日本語教育」であったと言えるだろう。

さて、「専門」に果敢に挑んで行かない限りその次のキーワードである「論文作成」には到達できないことも明白であった。そこでとにかく、理系学部・大学院を修了した背景を持つ日本語教授者をアレンジして、「論文作成能力醸成を最終目標としたプログラム」を大阪大学に創出し、留学生から好評を得た。専門を具体的に意識した留学生対象の日本語教育はこのようにして始まったのである。その当時、我が国の日本語教育界の著名な先生方を招いて講演会・討論会を何度も開催したが、諸先生の目はやや冷やかであったように今も記憶している。

今では、工学系に限らず、医薬系、農学系、社会科学系の専攻者、あるいは民間レベルの医療関係者や観光業従事者などを対象とした多様な専門日本語教育が実行されるようになった。そし

て、この教育の進展は、一方では「専門日本語教育学」の学問としての発展を進め、研究成果が蓄積されつつある。専門日本語教育の研究は、まず、独特の専門語彙の体系化、その適切な使い方の記述、それらを含んだ文章表現の特徴の分析などの面で進められてきている。この3方面には、それらを学習させるに適した教授法及び教材が存在する。それを提案することも、専門日本語教育学の重要な課題の一つである。また、専門分野と言っても、「理系」・「文系」のような大きな分け方から、「材料工学」などのような細分化されたまとめ方まで、認識の仕方は様々である。多岐多様にわたる学習者に対しどのように対応するか、その多様性を有効に生かす教育方法の提案も、専門日本語教育学の考えるべきことの一つであろう。

既に今日いくつかの大学では、明確に教科名として「専門日本語」が取り入れられ、初級教育の段階から専門日本語教育の必要性についての意識を持った教育が実施されている。これは、留学生教育の発展にも、日本語教育学の発展にも、極めて意義あることである。

「専門日本語教育学会」は、まだまだ若くて少人数の学会であるが、研究討論会では毎回活発な議論が繰り広げられ、学会誌『専門日本語教育研究』へ投稿された論考には極めて丁寧な査読を提供している。その学会誌もこのたび第10号を発刊する運びとなった。会員には、多彩なバックグラウンドを持つ日本語教育関係者に加えて、種々の専門分野の教育研究者が増加する傾向にある。また、本会の学会誌の掲載論文には高い評価が与えられている。査読論文を印刷公表することは研究者の重要な仕事であり、その機会提供こそ学会の使命であると考えている。同じ志を持つ教育研究者と歩んできた歴史を改めて振り返りつつ、そんな「専門日本語教育学会」の発展に今後も微力を尽くさせていただきたいと思うことである。

